



目次

横山 真「震災復興のための遺跡調査システム
開発について」

清野陽一「いわて高等教育コンソ シンポ参加記」

魚津知克「第2回防災遺産学フォーラム開催」

震災復興のための

遺跡調査システム開発について

私は岩手県盛岡市で株式会社ラングという考古学関係の会社を営んでいます。

東日本大震災後、未だ津波の被害に見舞われた沿岸域のために地元岩手の企業として何が出来るかを思案していた頃に、被災自治体の文化財担当の方からある相談を受けました。その内容は、新たな土地開発に先立つ遺跡調査に先端技術を導入することで、速やかな復興と文化財保護を両立できないだろうかというものでした。

そこで早速、奈良文化財研究所の金田明大主任研究員(CEDACH 代表)、3次元工学を専門とする岩手大学の今野晃市教授のご指導のもと、科学技術振興機構の研究助成「復興促進プログラム」に申請し、採択となりました。昨年10月から「ネットワーク型遺跡調査システムの開発」という3年間の開発プロジェクトがスタートしています。

津波被災地では、急増する遺跡調査件数に対し専属的に調査に従事できる専門員の数が不足しています。そこでこの開発では、まず前線となる被災地の「発掘調査現場」と後方支援を行う「情報解析センター」を設置し、それらをインターネット回線で結びます。そして前線では遺跡の地中探査データの入力、遺構や遺物の三次元計測データの入力を集中的におこない、後方では常時前線から送られてくる生データの統合や画像解析、判読の作業をおこなって、その情報を速やかに前線に戻すというワークフローをつくります。このように人的・知的・物理的なネットワークを活用することで、様々な制約のある

前線の作業をシンプルなものにし、効率的な遺跡調査を実現しようとするものです。

地中探査技術、三次元計測技術、画像処理技術は、

それぞれ個別のシステムとして既に考古学に活用されはじめている技術ですが、これらを如何にトータルシステムとして遺跡調査や整理作業に実装し、円滑に運用できるかがこの開発の最も大きな課題となります。今年度から実際に被災自治体の発掘調査現場をフィールドとして提供頂き、試験的な運用をおこなう予定となっています。

また、この開発で考案する仕組みは、もちろん効率的な遺跡調査、発掘調査報告書の作成を目指すものではありませんが、その過程で大量の数値情報が蓄積されることもひとつの特長となります。今回のテーマでは、これらの情報資産をインターネットを介して公開する仕組みまでを視野に入れています。この調査効率化の試みが、アーカイブ事業、教育普及事業の両面から、新たな社会的価値を生み出すことができればと考えています。(文責：横山)

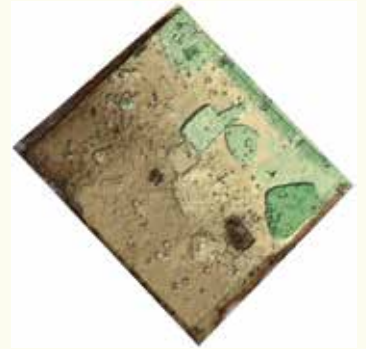


写真2 遺構解析画像



写真3 遺物解析画像



写真1 地中探査風景

いわて高等教育コンソーシアム シンポジウム参加記

2013年3月16日(土)・17日(日)の2日間にわたって、岩手県盛岡市においていわて高等教育コンソーシアム主催のシンポジウム「東日本大震災の検証と来るべき震災の備えへの提言—資料保存と救済のあり方から」が開催されました。いわて高等教育コンソーシアムとは、岩手県内にある5大学(岩手大学、岩手県立大学、岩手医科大学、富士大学、盛岡大学)が連携して行なっている戦略的・学際的連携支援事業で、今回のシンポジウムはこのコンソーシアムが、文部科学省の「大学等における地域復興のための

センター的機能整備事業」の採択を受け、その関連事業として開催されたものです。

全体は3部で構成されており、第1部が「文化財・資料」の保存と救済のための連携はどうあるべきか—国・地方公共団体・民間ネットワーク—として文化財関係の支援に関して、第2部が「公文書保存のあり方」として被災した公文書の保存のための様々な取り組みについて、第3部が「震災に際しての図書館」として災害を受けての図書館の取り組みについて、それぞれ発表とパネルディスカッションが行われました。

第1部は最初に東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会事務局長の岡田健さん（東京文化財研究所保存修復科学センター長）から基調講演として、東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援事業（文化財レスキュー事業）についての概要の説明があり、続いてパネリストとして、岩手県立博物館の赤沼英男さんから岩手県立博物館の支援活動、大槌町教育委員会の佐々木健さんから大槌町での取り組み、岩手大学の菅野文夫さんからは岩手歴史民俗ネットの活動が紹介されました。また、神戸大学の奥村弘さん（歴史資料ネットワーク代表委員）や静岡県教育委員会の笹原千賀子さんがコメンテーターとしてパネルディスカッションに登壇され、司会の盛岡大学・大石泰夫さんとともに、活発な議論が行われました。

第2部は国文学研究資料館の青木睦さんから、主として釜石市の公文書レスキューの話がなされたほか、熊本県天草市立天草アーカイブズ館長の金子久美子さんから天草アーカイブズ設立と平成18年7月豪雨災害に関する活動、宮城学院女子大学の大平聡さんからは、公文書としてその存在が等閑視されている学校資料の主に県内での保存活動について、長岡市立中央図書館文書資料室の田中洋史さんからは新潟県中越地震の際の被災歴史資料と災害記録の保全の取り組みが紹介され、司会の盛岡大学・熊谷常正さんと災害と公文書・アーカイブの関係についてパネルディスカッションが行われました。

第3部では前神戸大学附属図書館・現帝塚山大学の稲葉洋子さんから神戸大学附属図書館の「震災文庫」（阪神・淡路大震災関係資料文庫）構築に係る活動が、岩手県立図書館の齊藤力矢さんからは東日本大震災で被害を受けた岩手県内の市町村立図書館等への岩手県立図書館としての支援活動についてが、盛岡大学の千錫烈さんからは宮古市立田老第一中学校および陸前高田市立図書館・野田村立図書館などの被災地図書館の支援活動を学生とともにどのように行ったのかの報告がなされ、司会の富士大学・斎藤文男さんとともに、震災に際して図書館の役割についてパネルディスカッションが行われました。

各部とも非常に活発な議論が行われ、論点は多岐に渡りましたが、最も重要なのは、災害が起きてから動くのではなく、普段から関係者間のつながりを作っておくこと、これが非常時に最も機能する、という点でした。制度や組

織も重要なのですが、非常時ほどお互いの存在を知っていることで、話が早くスムーズに進むとのことでした。結局は人と人との信頼関係を普段からどれだけ構築しておけるか、そのような取り組みを平時からしているか、ということが、不可避な自然災害という脅威の前では即効性のある力になるとのことでした。凄まじい救援・支援活動の事例を次々と見聞きする中で、CEDACHもこのような普段からの人的ネットワークの構築に少しでも貢献出来れば、と会場の片隅で改めて強く感じました。（文責：清野）

第2回防災遺産学フォーラムを 開催しました

3月24日（日）、第2回防災遺産学フォーラム「災害からの復興と文化遺産—国内と海外の事例—」を開催しました。大手前大学史学研究所との共催で、トヨタ財団研究助成プログラムの内容を一般に公開するものです。

まず、海外の事例として、「タイ大洪水からの復興と文化遺産」と題して、タイ王国・シルパコーン大学准教授のタニック・ラーチャリットさんから報告が行われました。発表は英語で、日本語通訳がつけました。

つづいて国内より、「福島県の復興と埋蔵文化財保護」と題して、福島県教育庁文化財課の山本誠さんから報告が行われました。山本さんは、兵庫県から派遣されております。被災地の実情をつぶさにお話しいただきました。

参加者は35人程度と比較的少数でしたが、国内外の状況について、熱心な議論が交わされました。フォーラムの様態については、複数の新聞報道がなされました。今後、研究助成の一環として、記録集を編集する予定です。（文責：魚津）



CEDACH ニュースレター Vol.10

2013年4月12日発行

編集・発行

CEDACH 広報チーム

〒662-0965 兵庫県西宮市郷免町 8-17

大手前大学史学研究所内 CEDACH 事務局

TEL : 0798-32-5007

FAX : 0798-32-5045

E-mail : info@cedach.org

URL : http://cedach.org